『西番館来文』に見られる
チベット文字表記漢語について

更　科　慎　一

１．はじめに

１．１．『華夷訳語』とその『西番館訳語』

『西番館訳語』（または『西番訳語』）は、明清代に朝廷で編纂された異言語学習叢書『華夷訳語』のうち西番語、すなわちチベット語を扱った書である。『西番館訳語』自身の中では、「西番」を bod-kyi（チベット - の）と対訳し（乙種本雑字691；来文東洋文庫本第一通ほか随所）、単漢字「番」を bod（チベット）と訳すこともある（乙種本雑字685「生番」：bod rgod；同702「番漢」：bod rgya など）。

『華夷訳語』は、研究者たちによって甲、乙、丙、丁の四種に大別され、また多くの言語の version があるが、本稿では、乙種本の『西番館訳語』を取り扱う。

１．２．『西番館訳語』（乙種本）について

乙種本は、『華夷訳語』のうち、明の永楽5年（1407）に設立され、漢字以外の文字を含んだ外交文書の読解・作成およびそのための人材の育成を任務とする四夷館で編纂されたものを指す。十言語の version があり、それぞれは対訳語彙である「雑字」と、対訳例文集である「来文」の二つの部分から成る[1]。雑字では、「××門」と標題のついた分類範疇によって語句が配列されており、各項目は漢語による見出しと、その学習対象言語による対訳から成る。対訳は、学習対象言語で用いられている文字と、発音を表記した漢字（音訳漢字）の両様に表記されているのが特徴である。「雑字」の一部の本には、「新増」「続増」「増訂」などと題した増補語彙が附されている。来文もまた漢文面と表記対象言語の文面の対訳の形式をとる。音訳漢字はない。一通あたり漢字にして数十字から百字程度、半葉二面以内に収まる書状が、学習対象言語の対訳を伴って、十数通から数十通綴じ込まれている。来文の内容は主として、異民族地域から明の朝廷に宛てた奏上文であるが、朝廷から異民族の人々に宛てた勅諭や、まれに一般書の一部分であることもある。

乙種本は中国本土、台湾、日本、ヨーロッパなど世界各地に散在しており、雑字と

[1] 但し、西天（サンスクリット）語の version である『西天館訳語』は、知られる限りにおいて、「西天真実名経」の梵文テキストとその音訳漢字の対照であり、雑字とも来文とも異なった特異な体裁である。

来文を共に含む本もあれば、どちらか一方のみを含む本もある。『西番館訳語』の諸本については、西田（1970）に詳しい。本稿筆者が扱い得る乙種本『西番館訳語』雑字は、本編については北京図書館本、パリ・アジア協会本、京都大学蔵清刊本、ベルリン本、Amiot 将来清抄本、天一閣本、ケンブリッジ本であり、続編についてはベルリン本と東洋文庫本である。また、本稿筆者が扱い得る来文は、ベルリン本、復旦大学蔵『四庫存目書』本及び『西域同文表』本であり、東洋文庫本については、西田（1970）の記述によることとする。また、Amiot 将来清抄本の来文については、京都大学文学研究科図書館に所蔵されている Amiot 本の写真によって漢文面を短時間観察し、『四庫存目書』本の最初の20通に相当する内容である可能性が高いことを確かめ得た。

１．３．『西番館訳語』来文のテキスト

西田（1970）が用いた『西番館訳語』来文のテキストは東洋文庫本であり、通数は30通である。このほか、西田（1970）が利用していない四庫存目書本とベルリン本にはそれぞれ48通、30通の来文が存在している。ベルリン本と東洋文庫本に共通する来文は3通のみであり、また四庫存目書本はベルリン本とは13通が共通する一方、東洋文庫本とは1通も共通しない。『西域同文表』の全20通は四庫存目書本の最初の20通と同内容であり、Amiot 将来本の全20通の内容も、筆者はまだチベット語文面を突き合わせてはいないが、漢文面から見て、四庫存目書本と全く同じであると推測される。以上を併せて、我々は92通の異なった来文を得ることができる。これら92通の対照表を下表に示す。

表1　各本『西番館来文』内容対照表

存目書	伯林	東洋	Amiot[2]	奏上者 ※四庫存目書本 No.8の欄のみ、差出人と宛先
1			1	雑道長官司長官都指揮僉事結敦蔵卜
2	1		2	如来大宝法王哈哩麻巴差来禅師貞巴俄些児
3			3	赤斤蒙古衛都指揮使鎖南肖
4	2		4	賛善王昆葛堅参巴蔵卜
5	3		5	四川天全六番紹討司土官阿塔児
6	4		6	輔教王差来広善禅師桑児結領占
7			7	陝西岷州衛大崇教寺広善禅師桑児結堅参
8	5		8	※欽差四川長河西魚通寧遠等処総兵官より西番大小頭目へ
9	6		9	霊蔵賛善王

[2] 『西域同文表』本の状況も同じ。

10	7		10	答倉輔教王南渇扎失
11			11	陝西文県千戸所悪利簇簇頭沙加星吉等
12	8		12	大乗法王差来使臣遠丹
13			13	烏思蔵広徳寺番僧班卓児
14			14	董卜韓胡宣慰使司舎人蔵卜
15			15	長河西朶甘寺僧人扎巴堅参
16			16	烏思蔵闡教王端竹扎失
17			17	生番頭目汪束堅参
18			18	陝西岷州衛永安寺僧人沙加俄些児
19	9		19	陝西岷州衛永安寺禅師沙加領占差来徒弟汪束堅参
20			20	西番董卜韓胡宣慰使司宣慰使扎失領占
21				蔵薩思加輔教王羅竹蔵卜
22	10			烏思蔵怕木竹巴国師班卓児
23				四川宣慰使司宣慰使俄些児
24				霊蔵賛善王臣扎思巴
25				西番地面古墩加木隆地方吉祥寺番僧朶児只等
26				答蔵輔教王端竹完卜差大国師簇克林
27				大乗法王南渇遠丹差来使臣汪束星吉
28				西番地面吉祥寺進貢番人完卜扎失
29				陝西西寧衛延寿寺国師鎖南蔵卜差来徒弟沙加領占
30				烏思蔵広徳寺進貢番人羅竹遠丹
31	11			陝西岷州衛永安寺僧人班卓児
32				生番頭目舎剌蔵卜
33				答蔵輔教王南渇扎失
34				大隆善護国寺都綱端竹扎失
35				霊蔵賛善王差来番人遠丹蔵卜等
36				安定衛安定王男領占俄些児
37				烏思蔵闡教王沙加班卓児
38	12			番国地面宝塔寺進貢番僧簇克林等
39				大乗法王剌瓦差来大国師完卜等
40	13			陝西河州衛竹竹簇普光寺禅師汪束班丹等
41				剌麻領占扎失
42				如来大宝法王差徒弟灌頂大国師扎失領占
43				陝西岷州衛差来進貢番人簇克林堅参等
44				長河西朶甘寺灌頂浄慈妙智国師扎巴堅参
45				烏思蔵闡化王差来使遠丹羅竹、沙加星吉二人
46				霊蔵賛善王差来番僧遠丹蔵卜

47				西番地面生番頭目汪束堅参
48				霊蔵灌頂国師賛善王塔児巴堅参的姪南渇堅参
	14	12		灌頂慈利翊善大国師尼麻奴
	15	27		霊蔵賛善王下剌麻端竹也舎
	16			国師扎失蔵卜
	17			烏思蔵闡化王差来番僧班丹蔵卜等
	18			（差出人なし）「生番頭目一起遠来…」
	19			（差出人なし）「西番大頭目等務使部下…」
	20			（差出人なし）「近年以来夷人赴京…」
	21			（差出人なし）「朝廷体　天地覆載之道…」
	22			（差出人なし）「夷人遠方来貢　朝廷…」
	23			（差出人なし）「国家重武職…」
	24			西番革匝簇番人鎖南扎失等
	25			大国師鎖南端竹徒弟堅参
	26			剌麻堅参巴蔵卜等
	27			岷州地界進貢番人領占桑児結等
	28			四川成都府金川寺剌麻領占扎失等
	29	23		灌頂弘慈広善大国師領占蔵
	30			四川黎州地方生番舎剌星吉等
		1		西番大国師扎失堅参
		2		大乗法王南渇扎失堅参巴蔵卜
		3		四川長河西魚通寧遠等処軍民宣慰使司土官扎巴
		4		烏思蔵闡化王堅参巴蔵卜
		5		答倉輔教王鎖南巴蔵卜
		6		烏思蔵闡化王差来使臣遠丹堅参
		7		罕東衛指揮同知班卓児蔵卜差来頭目領占等
		8		西番弘化寺剌麻領占堅参巴蔵卜
		9		西番使臣領占端竹
		10		弘化寺剌麻端竹綽蔵領占等
		11		朶甘衛差来進馬番人簇克林等
		13		西番僧人也舎蔵
		14		剌麻綽肖蔵卜
		15		陝西岷州衛大崇教寺禅師綽蔵領占等
		16		烏思蔵朶甘寺同招討司差来頭目阿塔児等
		17		烏思蔵輔教王差使臣都綱沙加星吉等
		18		陝西岷州辺境番僧星吉班丹
		19		烏思蔵輔教王差来使臣沙加星吉等

		20		烏思蔵永安寺禅師星吉等
		21		陝西都司岷州衛弘教寺番僧舎利星吉等
		22		烏思蔵灌頂大国師領占端竹也舎
		24		賛善王遠丹蔵卜
		25		永安寺禅師領占堅参
		26		西番竹竹簇番人綽単等
		28		陝西布政司西寧衛瞿曇寺差来番僧桑児結端竹等
		29		西番国王巴蔵卜
		30		大宝法王端竹差大国師領占

来文のサンプルとして、西田（1970）では扱われていない『四庫存目書』本第一通の漢文面とチベット文面を示す。その際、漢文面にはいわゆる繁体字を、字形にはあまり厳密にこだわらずに用いる。チベット語文面のローマ字転写は、Wylie 方式による[3]が、字母 ཁ は、目立つように、「 ' 」ではなく v を用いる。また字母 ཉ は、「ny」ではなく ñ を用いる。ñ を用いるのは、来文中に、ན n + ཡ -y- から成る ny という組み合わせが別に存在し、ཉ と区別する必要があるためである。斜体字にした転写綴りは、漢語音がチベット文字で表記されている。

チベット語文面において、各語句の下に、意味上対応する漢文の語句を示す場合は、現代日本通行の字体を用いる。下付き数字は、その語句が『雑字』に見える場合に、『雑字』における項番号（西田（1970）が附したもの）を示したものである。また、上付きの1), 2), 3), ... の番号は、必要に応じて附した注釈を表す。

なお、漢文面の「勅」「朝廷」は一字擡頭されている[4]。チベット語文面には擡頭が見られない代わりに、改行擡頭される語に対応する語句の前に符号“¦”（本稿ではこれを：で表す）が用いられている。チベット文面冒頭の“)) ｜｜”は来文各篇の冒頭に置かれる段落開始記号（꤮）を表し、末尾の“｜｜”は来文各篇の最後に置かれる段落終了記号（‖）を表す。

雑道長官司土官都指揮
僉事結敦藏卜奏為請給
勅書事臣本處地方險惡盗

[3] この方式を採用するのは、一般に普及しているからである。この方式では一つのチベット字母に対して2〜3個のアルファベットの連続を当てる場合がある点（例えば、ཤ sh、ཚ tsh など）にあらかじめ注意されたい。字母 ཨ をゼロ転写とする点にも注意。Wylie 式をはじめとするチベット文字のローマ字転写方式については、山口（1998：15-17）を参照。

[4] 明の皇帝に直接関係する語（「皇帝」「恩」「聖」「欽」など）は、他の来文の中で、二字擡頭されている。

賊往来臣欲奮力勦殺不

係領

勅人數難以調兵望

朝廷可憐見乞與

勅書一道令臣勦殺賊盗補

報便益

)) ｜｜ dzag-tavu *jang-gon-si* yul-dpon *du-drivi-huvi tshen-shi* ge-dun-rtsang-bu zhu-ba

雑道 長官司 土官138 都指揮 僉事 結敦蔵卜 奏586[1)]

don-la byon gnang：lung yige bya-ba blon-po *bun* la sa-phyogs g_yang-sa ngan-pa

為632 請568 給639[2)] 勅396[3)] 書678[4)] 事[5)] 臣135 本 処[6)] 地方50 険[7)] 悪[8)]

rkun-ma jag-pa vgro vong blon-po vdod *hwun* she-mong tshar-gcod-bsad ma *hi*

盗[9)] 賊182 往565[10)] 来567 臣135 欲[11)] 奮 力214[12)] 勦殺[13)] 不[14)] 係

rin：vjav-sa mivi grangs dkav-ba *yi tivu bing* re-ba：gong-mavi thugs la

領[15)] 勅395[16)] 人[17)] 数[18)] 難[19)] 以 調 兵 望[20)] 朝廷134[21)] 可憐626［位格助詞］[22)]

btags *khi* byin：lung yige cig *tavu gling* blon-po tshar-gcod-bsad jag-pa rkun-ma

見[23)] 乞 与637 勅396 書678 一531 道 令 臣 勦殺 賊 盗

bsab-par khe-byung ｜｜

補報646[24)] 便益581

（この来文の注釈）

1）チベット語詞 zhu ba が登録されている雑字586の見出し漢語は「告」であり、ここでの「奏」とは一致していない。

2）雑字639の見出し漢語は「賞」、チベット語は gnang ba。

3）雑字396、「勅諭：lung-bsgrags」の前半部。西田（1970）が東洋文庫本来文第二通の注釈3（西田1970：125）でも指摘しているように、雑字には「勅書」の項がある。しかし、そこに登録されたチベット語詞 vjav sa が、ここでは用いられていない。本来文の他の箇所には vjav sa が用いられているが、対応する漢文面は「勅書」ではなく「勅」となっている。この来文の注釈16参照。

4）このチベット語詞が登録されている雑字678の見出し漢語は「字」。なお本語詞は、『西番館訳語』の雑字・来文を通じ、チベット語文法学で tsheg と呼ばれる点（▼）を用いて音節を区切るチベット語文の原則に拠らず、常に yige と連書されている。

5）この語は雑字本編には見えず、ベルリン本の続編の語彙項目「管事：bya ba gñer ba」（37a）の構成要素として見えている。

6）la はチベット語の位格助詞であるが、ここでは「処」の訳語として用いられている。東洋文庫本来文第三通にも「…等処：mgo byas la」の例がある。西田（1970：126）、第三通の注釈2を参照。

7）この語、及びそのチベット語詞との対訳関係は雑字本編には見えず、ベルリン本の雑字続編に登録されている（31b）。

8）「悪」は雑字に登録されていないが、雑字88「悪水：chu ngan pa」の構成要素として見える。

9）雑字に登録されていない。rkun ma, “one who steals; a thief”（Das（1902/1997：76））。

10）雑字565の見出し漢語は「行」。

11）雑字に登録されていない。vdod pa, “to desire with the mind”（Das（1902/1997：690））。

12）雑字214の見出し漢語は「力気」。

13）この語及びそのチベット語詞との対訳関係は雑字本編には見えず、ベルリン本の雑字続編（39b）に登録されている。

14）ma はチベット語の否定辞。雑字において単独では登録されていないが、601「不見：ma mthong」などいくつかの項目の構成要素として見える。

15）来文における「領」字のチベット文字音写は、四庫存目書本と東洋文庫本では rin とするが、『西域同文表』本では ring とする。

16）雑字395の見出し漢語は「勅書」。

17）雑字703「番人：bod mivi」などに出現する mivi を訳に用いたもの。理由は不詳であるが、語幹の mi“人”の形ではなく、属格助詞 -vi のついた形（“人の”）になっている。来文のこの箇所においても mivi となっており、属格形が踏襲されている。

18）「数」は雑字本編には登録されていないが、ベルリン本の雑字続編（55b）に登録されている。

19）雑字719に「艱難：dkav las che」が見える。dkav, dkav ba, dkav bo, “hard, difficult”（Das（1902/1997：50））。

20）雑字本編に登録されていないが、ベルリン本の雑字続編（57a）に登録されている。re ba, “hope”（Das（1902/1997：1189））。『西域同文表』本は re と ba の間の tsheg を脱落させ reb としている。

21）雑字134に登録されたチベット語形は gong ma。来文のこの箇所の形は属格助詞の -vi がついたもの。

22）注釈6参照。但し、ここでは対応の漢文面がない。

23）雑字に登録されていない。漢語“見”はベルリン本の雑字続編に登録されている（59a）が、そのチベット語対訳は mthong であり、来文のこの箇所と合わない。btags なる語について、西田（1970：125）は、東洋文庫本来文第二通に対する注釈19で、チベット語文語 btags-pa “bound tied” に対応すると記している。今按ずるに、btags-pa, “bound, tied”（Das（1902/1997：529））。「可憐見」は西番館来文には頻出する語句であり、特に本例に見るように「望朝廷可憐見」という文脈に多く用いられる。常に thugs la btags と訳されている。『蔵漢大辞典』vdogs pa の項（張怡蓀（1993：

1413)）に thugs-la vdogs pa“关怀，关切”とあり（btags pa は vdogs pa の過去形）、来文での表現と一致する。

24）雑字646の見出し漢語は「図報」。

西田（1970）も指摘するように、来文において、チベット語の文面は、漢文面の語句を、語順を変えずに逐語訳することによって構成されている。チベット語の語順が無視される状況もいたるところにある。例えば本来文の漢文面「勦殺賊盗」（盗賊や泥棒を討伐し殺す）を tshar-gco（討伐する）bsad（殺す）jag-pa（盗賊）rkun-ma（泥棒）と訳している。チベット語では動詞が目的語の後ろに置かれるが、来文では漢文の語順の通りに、動詞が目的語の前に来ている。また、漢文面に見える「為請給勅書事」（勅書を給することを請う事のため）では「為」を don-la と訳してフレーズの冒頭に置き、「事」の訳である bya-ba を最後に置いている。同様の用法（為…事：don la ..... bya ba）は東洋文庫本来文第一通の「為進貢事」の訳に見え、西田（1970：122）はこれを「もはやチベット語的な表現とは言えない」と指摘している。

一方で、来文のチベット語が全く漢語の奴隷的直訳表現のみから成ると見ることもできない点は注意を要する。例えば「朝廷可憐見：gong mavi thugs la btags」（上の注釈23参照）は必ずしも逐字訳になっておらず、チベット語に実際に存在する表現に訳されている上、-vi「の」、la「に」のような格助詞も正しく使われている。かなり限定的で僅かであるとは言え、来文の作成者は、チベット語の文法に関する知識も持っていたと考えられる[5]。

雑字においては、二つ（以上）の語から成るフレーズがある場合、語順等はチベット語の文法に合致する。例えば：

「白霜」：bad dkar（霜-白い）（37）　――名詞＋形容詞

「仏境」：sangs rgyas kyi zhing（仏-の-地）（83）　――属格助詞、-s の直後で正しく kyi を用いる

「五綵」：tshon sna lnga（色-種類-五）（357）　――名詞＋数詞

「叩頭」：mgo brdung（頭-叩く）（612）　――目的語＋動詞

「是我」：nga yin（私-です）（644）　――補語＋コピュラ

のように、チベット語の単語を、漢語の語順ではなくチベット語本来の語順に従って並べている。

---

[5] 四夷館内に、『西番館来文』の編纂に当たって参考にされた、我々に未知の、かつチベット語が必ずしも漢語からの奴隷的直訳ではない対訳文書が存在し、その中に「朝廷可憐見」の文言が含まれており、『西番館来文』の作成者がそれを抜き出して用いた、という可能性もある。

西田（1970：122）は、東洋文庫本の西番館来文全三十通を検討した結果として、西番館来文に用いられているチベット語の単語は､原則として雑字に登録されている、と指摘している。いま、上に検討した『四庫存目書』本第一通を構成する単語について、実際に雑字に登録されているか否かを調べてみると、次のようになる。

A. 雑字に登録されている語

本編に登録され、来文に見える漢語・チベット語の語形が、雑字本編におけると全く同じ：土官、為、請、臣、地方、賊、来、可憐、与、一、便益

本編に登録され、漢語・チベット語のいずれかあるいは双方の語形において、雑字本編と部分的な差異がある:奏、給、勅（～書）、書、事、悪、往、人、力、不、勅（領～）、難、朝廷、補報

本編には見当たらず、ベルリン本の雑字続編に登録されている単語:険、勦殺、数、望

B. 雑字に登録されていない語

一般語：処、盗、欲、見

地名・人名・官職名：雑道、長官司、都指揮、僉事、結敦蔵卜

漢字を音訳した語：本、奮、係、領、以、調、兵、乞、道

『四庫存目書』本来文第一通においても、西田（1970）の指摘する通り、漢文面の大半の単語は雑字に登録されており、来文作成にあたり雑字が活用されたことがわかる。一方で、雑字に見えない語も一定数ある。中でも目を引くのは漢字の音訳語である。先ず、“都指揮僉事”のような官職名に漢字音訳が見えるが、中国特有の官僚制度に関わる語が非漢語の素材を用いて意訳されず、音訳となることは、常識的に考えて理解できることである。しかし、一般語彙にも、音訳されるものが複数ある。それらの中には、khi“乞”のような動詞や、tavu“道”のような量詞、yi“以”のような虚辞など、音訳という扱いが極めて奇妙に思えるものが少なくない。中でも奇妙に思えるものは、漢文の熟語の一部を音訳し、一部を意訳した語句の存在である。他の来文から、任意に六つの例を挙げる：

「天朝」：gnam *chavu*（cf: gnam「天」、『雑字』1）

「旧制」：rñing pa *ci*（cf: rñing pa「旧」、『雑字』642）

「進了」：*tsin* tshar（cf: tshar「了」、『雑字』624）

「遵守」：*dzun* bsrung（cf: srung ba, “to watch to keep guard, to guard, to keep in custody, to save from, to protect, to shelter”（Das（1902/1997：1292））、bsrung は未来形）

「感恩」：*gam* drin（cf: drin「恩」、『雑字』634）

「所用的」：*zho* vkhol *ti*（cf: vkhol「用」、『雑字』671）

ローマ字転写を斜体字にした部分が音訳されている部分である。この種の音訳-意訳語（？）において、チベット語に意訳されている部分は、多くの場合、雑字に登録されている語であり、逆に、音訳されている語は、基本的に、雑字に登録されていない[6]。

音訳語は、一般に乙種本華夷訳語の来文には広く見られるものである。例えば：

『韃靼館来文』[7]：ji“隻；之；致”、yu“欲；育”、ling sau“凌弱”、si“子；使；事；失；施”など

『高昌館来文』[8]：bi“匹；疋”、läu“了”、mui“毎”、mung“蒙”など

『女真館来文』[9]：di“的”、ge“箇”、gun“功”、gin“境”、ji“子”など

『回回館来文』[10]：fū“服”、dī“的”、jī“隻”、ziyān“将”など

“蒙”“的”“匹”などの字は、複数の言語の来文において音訳されている。熟語の一部を音訳し一部を意訳した語句の例もあり、例えば『高昌館来文』には「衣服」：ton *fuu* という例が見られる。ton は「衣」の意味のウイグル語（『高昌館雑字』445）であり、一方 *fuu* は漢語「服」の音訳である[11]。

２．『西番館来文』に見られるチベット文字音写

２．１．データ一覧

ベルリン本、東洋文庫本、四庫存目書本に見られる計92通の中に、チベット文字で音写された漢字は異なり字数にして308個[12]があった。数が比較的少ないので、ここにその全てを、チベット文字のローマ字転写と共に録す。なお、【　】に入れた注記は、その左側の一字のみに対するものである。【声！】は声母の異常対音で、【韻！】は韻母の異常対音である。多くは『来文』の編纂者または書写者によるチベット文字の書き誤りと見られる。

---

[6] 上の例の「進了」の「進」については、この字単独では『雑字』に登録されていないものの、この字をほぼ同じ意味（献上する）で構成要素の一部に用いた「進馬」という見出し語が『雑字』714に見え、rta vbul というチベット語が記載されている（rta, 雑字451「馬」; vbul ba, “to give, profer; to send, when the person receiving is considered to be of higher rank”（Das（1902/1997：921））。しかし、来文には活用されなかった。

[7] ベルリン本、及び『北京図書館戸籍珍本叢書』6 経部（書目文献出版社、刊行年不詳）所収の『高昌館課』本を参照した。

[8] 更科（2021）参照。

[9] Kiyose（1977）参照。

[10] 本田（1963）参照。

[11] 更科（2021：78）参照。

[12] 同じ漢字に対するチベット文字音写綴りは、ほとんどの場合各来文間、諸本間で同一であるが、まれに一つの漢字が出現箇所により異なった綴りで表記されている例がある。その場合は、そのそれぞれを別々に数え、下の一覧においても別々に掲出した。

◆ b

bavu 寶保｜ byavu 表｜ bam 頒｜ bin 秉｜ bun 本｜ bing 兵

◆ p

pi 被備｜ pu 布部｜ pavi 敗｜ pau 暴｜ pan 半｜ pen 忭｜ pang 邦

◆ ph

phi 匹｜ phu 普｜ phing 平

◆ m

mu 糢｜ mivu 陪【声！韻！】｜ min 岷｜ ming 明｜ mong 蒙

◆ dm

dmu 慕睦｜ dmyavu 妙｜ dming 命

◆ d

dad 徳｜ du 都｜ davi 大

◆ t

ti 嫡的｜ tavi 大｜ tavu 道導｜ tivu 調｜ ting 頂定｜ tong 東

◆ th

thav 塌｜ thi 提題体｜ thu 土｜ thavi 太｜ thavu 討洮｜ than 曇坍｜ then 天塡｜ thun 同潼｜ thung 通

◆ n

navi 乃｜ nyang 仰｜ ning 寧

◆ l

li 履理礼籬黎｜ lu 路六｜ lavi 賚来｜ lam 襴｜ lin 林｜ lung 隆

◆ g-l（gl）

g-li 暦利｜ g-lin 令｜ gling 凌｜ g-ling 令

◆ ts

tsi 茲資｜ tsan 賛｜ tsin 進｜ tsing 浄靖

◆ dz

dzi 齎｜ dzun 宗遵尊｜ dzung 総

◆ tsh

tshe 且｜ tshi 慈｜ tshen 千僉｜ tshyon 全｜ tshun 村｜ tshang 蒼｜ tshing 清曽｜ tshong 存

◆ s

si 絲思四司｜ sing 信｜ sung 誦

◆ z

zi 食【声！】｜ zi 西｜ zivu 修｜ zun 循｜ zwon 宣｜ zyang 祥

◆ dr

dra 箚｜ dri 知之｜ drivi 指

◆ shr

shri 師使

◆ r

re 而｜ ru 擄｜ ryavu 聊｜ rin 廩領｜ ryog 掠

◆ c

ci 治制智｜ cu 鋳逐紵｜ cau 招｜ cwon 篆｜ cin 鎮｜ cing 症正政｜ cong 鐘｜ cun 種

◆ j

je 者｜ ji 支隻｜ jivu 州｜ ju 株諸朮｜ jwavu 准【韻！】｜ jwon 専｜ jang 掌張長

◆ ch

chavi 冊｜ chavu 朝｜ chan 攙｜ chen 禅闡｜ chwon 川｜ chang 倡嘗長｜ ching 陳成乗誠懲｜ chung 崇

◆ ñ

ñing 寧

◆ sh

sha 沙｜ she 舎｜ shi 使事視｜ shu 庶｜ shen 善｜ shin 甚｜ shun 順｜ shing 勝盛

◆ zh

zho 所｜ zhi 食｜ zhivu 寿｜ zhen 陜

◆ gzh

gzhan 然｜ gzhin 仁任｜ gzhu 如

◆ k

kyavi 戒｜ kavu 誥｜ kyavu 教｜ kon 灌

◆ g

gya 嘉｜ gwa 寡｜ ge 結｜ gi 及吉｜ gu 古｜ gyu 倶拒｜ gavi 該｜ gyavi 階皆｜ guvi 国｜ gyivu 久｜ gam 敢感｜ gyen 堅｜ gon 官関｜ gin 金｜ gang 剛綱｜ gwang 光広｜ ging 荊経｜ gying 警｜ gung 公工恭｜ gong 関

◆ kh

khye 缺闕｜ khyo 恪【韻！】｜ khi 乞｜ khu 庫｜ khyu 瞿｜ khan 勘｜ khin 欽｜ khyan 愆｜ khyen 虔｜ khakha 懇【韻！】

◆ h

hya 夏｜ ho 貨合河何呵｜ hi 係｜ hu 戸糊護湖｜ huvi 慧揮｜ havu 懽【韻！】｜ hyavu

暁｜ham 罕翰｜hyen 献県｜hyang 項｜hying 幸｜hung 弘

◆ hw

hwa 化法｜hwu 伏府輔赴付｜hwuvi 非｜hwou 懐【韻！】｜hwan 藩繁犯｜hwon 患｜hwun 奮捧

◆ ng

ngan 安

◆ phy

phyi 悉膝

◆ゼロ（ཨ）[13]

u 悞母【声！】

◆ db

dbuvi 衛未

◆ v（ཝ）

vu 邇【韻！】

◆ w

wu 武｜wun 文｜wang 王

◆ y

yo 躍｜yi 依以儀宜已矣｜yu 於魚｜yovu 遥｜yevu 優｜yivu 由｜yan 沿延｜yon 員原元｜ying 英纓｜yung 永踴允

◆ g-y

g-yi 意益駅抑義亦翊｜g-yu 慰｜g-yon 院｜g-ying 応

２．２．声母の対応

２．２．１．全般的対応

前節2.1に示したチベット文字表記の漢字音のうち、母音より前の部分（即ち、音節初頭子音）は、大筋において、漢語音[14]の声母との間に、表2に示すような対応関係を見せる。

チベット文字の音節初頭子音は、一般に、前置字＋上置字＋基字＋下置字という構

[13] 転写ではゼロであるが、れっきとした子音字母（ཨ）であり、かつ音声的には、ちょうど漢語の影母の如く、声門閉鎖音 [ʔ] であると考えられるので、純粋なゼロ声母とは言えないが、本稿では便宜的に「ゼロ」と称する。

[14] この場合の「漢語音」とは、それぞれのチベット字母（もしくはその結合）が表記したと考えられる漢語音を指すが、表の「漢語音」欄に示した音素表記は、厳密な考察を経た「再構音価」ではなく、チベット文字の音価及び近代漢語音の全般的状況から類推される便宜的、暫定的な表記である。その音価に関しては、必要に応じて、後の文で議論することとする。

造を持ち、このうち基字だけが必須である。『西番館来文』の漢字音表記では、前置字 g-, d- が時折用いられるが、上置字は用いられた例がない。前置字 g-, d- は、西番語としては多くの場合実際に前置子音として発音されたことが『雑字』の音訳漢字から確認できるが、来文の漢字音表記に用いられたものは、単音に該当したとは考えられず、実際には声調調類と関係がある（この点については、下記2.2.2においてふれる）。結合 db- はたいへん特殊で、西番語において、a、u の前で音素 /w/ に該当する[15]。下置字 -y- と -w- はおおむね韻母表記の構成要素として分析し表2には取り出さないが、ただ結合 hw- だけは漢語音の /f/ と対応することが明らかである例を含むので、表2に列しておいた。声母の異常対音は表に列しない。

表2　チベット字母と漢語声母の対応関係

蔵文	漢語音	古声母
b	/p/	幇, 並仄
p		
ph	/ph/	滂, 並平
phy	/s/	心（細音）
m	/m/	明
dm		
hw	/f/	非, 敷, 奉
	/xu-/	暁, 匣
d	/t/	端, 定仄
t		
th	/th/	透, 定平
n, ñ	/n/	泥, 疑
l	/l/	来
gl, g-l		
r		
	/・/（開）?	日（“而”字）
ts	/c/	精, 従仄
dz		
tsh	/ch/	清, 従平
s	/s/	心, 邪
z		
j	/č/	知, 章, 澄仄
c		
dr		
ch	/čh/	初, 昌, 崇平, 澄平, 禅平, 船平
sh	/š/	生, 崇仄, 書, 禅仄, 船仄
zh		
shr		
gzh	/ř/	日
k	/k/	見, 群仄
g		
kh	/kh/	渓, 群平
ng	/ŋ/	影
h	/x/	暁, 匣
ゼロ	/・/（合）	疑, 喩, 微
db		
w	/・/（合）	微, 喩
v	/・/（開）	日（“邇”字）
y	/・/（斉撮）	影, 喩, 疑
g-y		

２．２．２．声母の清濁について

表2の中に、中古漢語の同じ（一つ又は複数の）声母類に対して、系統的に、二通り（時に三通り）のチベット字母表記が対応している（つまり、書き分けが見られる）もの

[15] 西田（1970：52）。

がある。具体的には次の対である。

（1）閉鎖音・破擦音類：チベット字母の b と p；d と t；dz と ts；j（dr）と c；k と g。

（2）摩擦音類：チベット字母の z と s；zh と sh（shr）。一方、hw（/f/）、hw（/xu-/）、h については、同じ中古漢語の声母類を表記している他の字母がなく、対を構成していない。

（3）鼻音・接近音・ゼロ声母類：チベット字母の m と dm；l と gl（g-l）[16]；w と db（ゼロ）；y と g-y[17]。一方、n、ñ、ng については、対を構成するには至っていない。

チベット文字の側から見ると、（1）と（2）はともに有声子音と無声子音の対であり、また（3）は、単純子音と子音結合の対である。（1）と（2）は漢語音韻史の用語で言うところの全濁音と清音の対を成しているが、漢語音側の全濁･清（全清音と次清音）の区別とは全く対応しておらず、両カテゴリーに属する字が、有声音と無声音のいずれの字母によっても表記されている。この様相は、言うまでもなく、漢語の側において、全濁音がすでに無声化し、平声が無声有気音に、仄声が無声無気音にそれぞれ合流した状態の反映である。したがって、これらの漢語声母が、チベット文字の側で有声 / 無声の二通りに書き分けられる理由は本来ないはずである。（3）について言えば、対応する漢語の側のカテゴリーは、影母が全清なのを除けば次濁であり、漢語音韻史における有声音の無声化とは直接関係しないから、やはり二通りの表記法には本来理由がない。この三つの場合になぜ、チベット字母の書き分けが存在するのかが問題となるが、この問題は『西番館雑字』におけるチベット語：漢語対音を検討することによって解決することができ、そして西田（1970）によってすでに、おおむね解決されている。

『雑字』では､チベット語（西田氏は『西番館訳語』が表記している言語を「西番語」と呼び､本稿で扱っている乙種本の西番語に対しては｢西番語 A｣の呼称を与えている）が漢字音訳されている。西田（1970）は、この音訳漢字に、明代後期の北京音系を代表すると一般に考えられている韻図『司馬温公等韻図経』に対する陸志韋（1947）の再構音価を当てはめた上で、漢語音が区別し得ないと推測されるが他のチベット語諸方言に照らして区別があったに違いない部分に対して「補整」を行って、音訳漢字から西番語の音形式を取り出そうとした。そこでは、チベット文字の有声の破裂音・摩

[16] 次注参照。

[17] チベット文字の綴字法において、音節初頭での g と y の連結には二通りがあり、一つは g が基字、y が下置字であるもの、もう一つは g が前置字、y が基字であるものである。両者は単なる綴り方の相違ではなく、音韻的相違を伴う。本稿では前者を gy、後者を g-y と転写する。gl と g-l も同様の関係を示す転写であるが、結合 g-l は雑字部分に存在せず、チベット語としても一般的ではないものであって、来文の漢語音表記での出現は特殊である。そして、g-l の表音的意図は gl と同じであると見られる（gl との相違が発見できない）。

擦音の基字と対応する西番語の子音として、有声子音が再構されている（西田（1970：78））。漢語音の側では有声の閉鎖・破擦音や摩擦音が（現代北京語と同様）すでに存在していないと見られるにもかかわらず、西田氏が西番語の側に有声子音を推定した理由は、チベット文語や現代チベット語諸方言との比較のほか、音訳漢字がとる声調に、次のような選択傾向が観察されるからである（西田（1970：73））：

チベット字母有声音：音訳漢字陽平調

チベット字母無声音：音訳漢字去声調

西田氏は、「明代北京語の声調型の実際は、明代のほかの資料から推測する方法がないが」[18]と断りつつも、現代北京語の調値から類推して、陽平調は上昇調、去声調は下降調であったと推定している。西田氏は、音訳漢字の声調の書き分けを、西番語の閉鎖音・破擦音・摩擦音になお存在していた有声無声の音素的対立に随伴する音調現象と見做したことになる。西田氏はさらに、鼻音、接近音から成る単子音の初頭音と、その直前に別の子音が加わった複子音の初頭音との間[19]にも同様の声調の書き分けを見出している：

チベット字母［鼻音、接近音］：音訳漢字陽平調

チベット字母［子音］+［鼻音、接近音］：音訳漢字去声調

本稿のテーマにとってとりわけ重要であるのは、西田（1970）において、上述の声調型の存在を論証する補助として、まさに本稿の研究対象である来文のチベット文字表記漢語が取り上げられている点である。西田氏は、来文において、無声無気音あるいは［子音］+［鼻音、接近音］の子音結合を音節初頭に持つ「意」g-yi、「歴」[20] g-li、「令」g-lin、「誥」kau、「信」sing、「誦」song を挙げて、この六字の声調が全て「去声」[21]であり、一方有声音あるいは接近音 y を音節初頭に持つ「食」zhi、「茶」ja[22]、「於」yu を挙げて、

---

[18] 西田（1970：73）。明代官話の声調調値は重要な問題であり、本稿でいま詳細に論じることはできないが、16世紀初めの朝鮮で編纂された中国語会話書『（翻訳）老乞大』の表音では、陽平調に、まさしく上昇調と解すべき声点が附されている。去声調について言えば、『翻訳老乞大』は陰平調と同じ声点を附しており、それは高調と解すべきであるから、『翻訳老乞大』の漢語では、少なくとも高い音程で発音されたことがわかるが、下降していたかどうかは、この声点システムからはわからない。しかし、現代北京語の去声の調値から推論して、下降していた可能性は小さくないであろう。『翻訳老乞大』の声調について、遠藤（1984）参照。

[19] 西田氏が具体例を挙げている対は、ñ と C_1ñ、ng と C_1ng、m と C_1m、l と C_3l、の四つの対で、各対の前者が上昇型（陽平）、後者が下降型（去声）の音訳漢字をとる（西田（1970：74-75））。C_1は前置字または上置字で、西田氏の用例中では g, d, m, s, r などの子音が該当する；C_3は同じく基字で、西田氏の用例中では g, b, r などの子音が該当する。

[20] 西田（1970：77）において「歴」の出所として記載された来文二十九通目には、「歴」の代わりに「暦」の字が見える。「歴」が「暦」の誤字だとしても、ここでの議論に影響はない。

[21] ここでの「去声」は古漢語の調類ではなく、西田氏の拠った『司馬温公等韻図経』での去声である。陸（1947）は、この韻図で、古漢語の去声及び全濁上声のみならず、次濁入声も去声に派入しているとした（『司馬温公等韻図経』に収録された入声字を実際に検討してみれば、この考えは妥当である）。

この三字の声調が全て「如声」即ち陽平声[23]であると指摘して、雑字における西番語音節初頭の有声 / 無声と陽平 / 去声との対応関係のいわば傍証とした（西田（1970：77））。

西田氏の挙げる例のうち「誥」kau は本小節（2.2.2）冒頭の（1）の場合に、「信」sing、「誦」song、「食」zhi は同じく(2)の場合に、「意」g-yi、「歴」g-li、「令」g-lin、「於」yu は同じく（3）の場合にそれぞれ相当する。ここで、西田氏の論証に対する一種の検証として、(1)～(3) の場合に該当する来文の漢字の声調を確認してみよう。以下の挙例では、各字の調類は一旦古漢語の四声と清・次濁・全濁の別を明らかにし、その後近代北方官話音韻史の通例に倣い、「…」に続けて、『西番館訳語』の漢語基礎方言として想定される調類を記す。その要領は下記の通り：

清平声　→　陰平声

次濁平声、全濁平声　→　陽平声

清上声、次濁上声　→　上声

清去声、次濁去声、全濁上声、全濁去声　→　去声

但し入声については憶測を加えず、清入声、次濁入声、全濁入声の表示をそのまま残す。

(1) 閉鎖音・破擦音類

b

寶保表本秉以上清上…上声

頒兵…陰平声

p

邦…陰平声

被部以上全濁上；布半以上清去；備敗暴忤以上全濁去…去声

d

都…陰平声

「歴」（次濁入声）が「去声」とされるのは西田氏が陸氏のこの考えを受け入れたためである。『司馬温公等韻図経』自体に「歴」（暦）の字は収録されていない。

[22]「茶」を ja と音写するのは、来文の表音方式からすると例外的である。「茶」は澄母平声であり、声母・声調に関して同じ音韻地位にある「朝」「長」「陳」などと共に、本来 ch をもって表記されることが予想される。実際のところ、ja は、チベット語で茶の意味であり、『雑字』312にも、「茶」ja(音訳漢字“扎”）が登録されている。本稿筆者は、この ja を漢語からチベット語に入った借用語と見做し、来文における漢語音のチベット文字表記とは見做さない。

[23]「如声」は『司馬温公等韻図経』の第四の調類の称であり、現代北京語の陽平声（第二声）にほぼ相当する。注13で去声について述べたことと同様、西田氏は、陸（1947）において、全濁入声字が次濁・全濁平声と同様「如声」に派入しているとする考え（この考えは『司馬温公等韻図経』において妥当である）に基づき、全濁入声字で、かつ『司馬温公等韻図経』には収録されていない「食」を、如声としている。

大全濁去…去声

徳…清入声

t

東…陰平声

頂清上…上声

道全濁上；大導調定全濁去[24]…去声

嫡的…清入声

dz

齎遵尊宗…陰平声

総清上…上声

ts

茲資…陰平声

賛進以上清去；靖以上全濁上；浄以上全濁去…去声

j

支株諸州専張…陰平

者准【韻！】掌長清上…上声

隻…清入

朮…全濁入

dr

知之…陰平

指清上…上声

箚…清入

c

招鐘…陰平

制智鋳鎮症正政種【耕～】以上清去；篆以上全濁上；治紵以上全濁去…去声

逐…全濁入

g

嘉該階皆堅官関【gon、gong 二形あり】金剛綱光荊経公工恭…陰平声

寡古久敢感広警以上清上…上声

倶清去；拒全濁上…去声

吉国…清入

及…全濁入

[24] 導は『広韻』定母去声であるが、現代北京語では上声に読む。

k

戒誥教灌以上清去…去声

(2) 摩擦音類

z

西修宣…陰平声

循祥以上全濁平…陽平声

食【声！】…全濁入

s

絲思司…陰平声

四信以上清去；誦以上全濁去…去声

zh

所陜以上清上…上声

寿全濁去…去声

食…全濁入

sh

沙…陰平声

使清上…上声

舎庶勝清去；善甚全濁上；事視順盛全濁去…去声

shr

師…陰平声

使清上…上声

(3) 鼻音・接近音・ゼロ声母類

m

糢【～糊】陪【声！韻！】岷明蒙以上次濁平…陽平声

dm

慕妙命以上次濁去…去声

睦…次濁入

l

籬黎来襴林隆以上次濁平…陽平声

履理礼以上次濁上…上声

路賚以上次濁去…去声

六…次濁入声

gl（g-l）

凌次濁平…陽平声

利令次濁去…去声

暦…次濁入声

w

文王以上次濁平…陽平声

武次濁上…上声

db

衛未以上次濁去…去声

y

依於優英纓…陰平声

儀宜魚遥由沿延員原元以上次濁平…陽平声

以已矣允永踴以上次濁上…上声

躍…次濁入声

g-y

応【一～】…陰平声

意慰以上清去；院義以上次濁去…去声

益抑…清入声

駅亦翊…次濁入声

今、上記の諸音節初頭子音を、有声音グループと、無声音及び［子音］＋［鼻音、接近音］グループ（以下、「無声音グループ」と略称する）とに分け、どの音節初頭子音のもとにどの調類の漢字音が表記されるかについて統計を取ると、次の表3, 4の通りとなる。

表3　有声音グループのチベット文字音節初頭子音で表記された漢字の調類分布

	b	d	dz	j	dr	g	z	zh	m	l	w	y	計
陰平	2	1	4	6	2	16	3					5	39
陽平							2		5	6	2	10	25
上	5		1	4	1	7		2		3	1	6	30
去		1				2		1		2			6
清入		1		1	1	2							5
次濁入										1		1	2
全濁入				1		1	1	1					4

表4　無声音グループのチベット文字音節初頭子音で表記された漢字の調類分布

	p	t	ts	c	k	s	sh	shr	dm	gl	db	g-y	計
陰平	1	1	1	2		3	1	1				1	11
陽平										1			1
上		1					1	1					3
去	8	5	4	11	4	3	9		3	2	2	4	55
清入		2										2	4
次濁入									1	1		3	5
全濁入				1									1

表3、4によれば、漢字音の去声字は、無声音グループで表記されたものが55字で、一方有声音グループで表記されたものは6字であるから、無声音グループとの相関が圧倒的に強いことが改めて確かめられる。注意すべきは、無声音グループのうち、摩擦音以外のものは、チベット語の綴りとして有標性が高いということである。無声無気の閉鎖・摩擦音の基字は、チベット語において前置字や上置字を伴う場合が圧倒的に多く、音節初頭において基字単独（もしくはそれに下置字が附されたもの）で現れた場合は、借用語等が中心であり、固有語での出現頻度はかなり小さいのである。そのため、表4において現れている無声無気の閉鎖・摩擦音による表記は、チベット文字の綴りとしては多少異質感を漂わせており、これをわざわざ用いることは、有声の閉鎖・破擦音を用いる場合と比べ、表音者において、「ここには無声無気音の字母を是非用いなければならない」という意志がより強く働いていると見るべきである。鼻音及び接近音の基字の前方に子音が附された綴りはチベット語固有の形態素にも頻出するが、前方に子音が付かない単純子音の m や l などと比べて有標であることは当然であり、やはり表音者の意図を強く感じさせる。こうした表記法が、去声字の表記に集中的に表れているのには、何らかの意味があるに違いなく、西田（1970）は、そこに下降の調値を読み取ったのである。去声以外では、次濁入声字が有声音グループ2（六躍）に対して無声音グループが5（睦暦駅亦翊）で、無声音グループによる表記例が有声音を上回っている。もしこの漢語音において入声の他の声調への派入がすでに始まっていたとすれば、次濁入声字が去声に派入していた可能性がある。

去声と次濁入声を除く他の調類では、有声音グループによる表記例の方が多い。特に陽平声では、有声音グループ25に対して無声音グループ1と圧倒的に有声音グループが選ばれており、すでに言及した「雑字」音訳漢字における有声音グループと陽平の対応（西田（1970））とも一致する。上声でも有声音グループ30に対し無声音グループは3であって、陽平と同様の傾向を示す。このことから、来文の漢語上声が調値上陽平と共通の性質を有していたと推測できる。但し雑字の音訳漢字においては、陽平

字の使用は極めて多いのに、上声字の使用が極めてまれである[25]ことから、上声には、陽平とは異なるある音声的特徴が存在していて、その特徴がチベット語の表音に用いられることを阻んだことが考えられる。他方、陰平は、有声音グループ39に対し無声音グループは11であって、無声音表記も少なくない。陰平の調値上の特徴が去声と一定程度類似していたことがここから読み取られる。

なお、次の表記例は、有声音グループと無声音グループの対を構成しておらず、どちらか一方の例しかない：

n：乃(上声)、仰(上声)、寧(陽平)；ñ：寧(陽平)；ng：安(陰平)；r：而聊(陽平)、擄廩領(上声)、掠(次濁入)

これらの例のチベット字母は全て有声音グループであり、漢字の調類は去声以外であるから、上述したチベット文字初頭子音類と声調との対応関係と矛盾していない。

また、h と hw は、有声音グループと無声音グループの対立がなく、表記例には去声字も非去声字も見られる。無声有気音 ph, th, tsh, ch, kh も対応する有声音グループを持たず、状況は h、hw の場合と同様である。

２．２．３．個別の子音について

2.2.3.1. gzh。表2に示したように、日母字と対応する。前置子音の g- がついていて、一見上述の「無声音グループ」の［子音］+［鼻音、接近音］のようにも見えるが、基字の zh はチベット文字としては摩擦音の字母であって、接近音の字母ではない。西田氏は、『西番館訳語』のチベット語の zh について [ʒ]（西田（1970：54））、同じく有声摩擦音である z については [z] と、いずれも有声音を推定している（西田（1970:53））。しかし実際には、雑字における音訳のなされ方から見て、zh, z は音声的に分裂している。西田氏も注意していて、用例の検討において α、β など、場合分けをしている。関連する用例を、西田（1970）の議論から引用してみよう（原文において用例に附された明代漢語音と現代中国語の読みは省略する。また、原文の康熙字典体は現代日本の新字体に改めた）。

zh の用例（西田（1970：54））

α）	zha	厦	zha ne	厦呆	錫（492）
	zhi	失	zhi ba	失瓦	柔善（176）
	zhu	熟	zhu ba	熟瓦	告（586）

[25]「雑字」の音訳漢字の上声字のまれな例の中に「紀」g-、「耳」d-、「母」m-、「本」b- という前置字母の対音があり、いつも有声の基字の前に現れる。西田氏は、これらの上声字が、有声基字音節がとる「上昇型」音調の開始部分を表していると考えている（西田（1970:77））が、驚嘆すべき卓見である。

	zhe	舎	zhe mes	舎滅思	高祖（155）
	zho	朔	zho	朔	酪（310）
β）	zhi	日	bzhi	卜日	四（534）
	zha（n）	然	gzhan	然	別（558）
	zho（ŋ）	戎	gzhoŋ pa	戎罷	盆（258）

z の用例（西田（1970：53））

α）	za	薩	za ma	薩麻	飯（307）
	zi	席	zil ba	席耳罷	露（11）
	zu	素	zug pa	素罷	白芨（515）
	ze	塞	lhuŋ bzed	倫卜塞	鉢盂（828）
	zo	梭	bzo ba bubs cig	卜梭瓦卜不思治	一套（928）[26]

β）【省略―引用者】

γ）	za（ŋ）	蔵	chu bzaŋ po	初卜蔵播	好水（87）

zh に関する西田（1970）による α、β への区分は、音訳漢字の書き分けと対応していることが明らかである。即ち、同じ zh が、α では漢語の「ʂ」声母（西田氏の再構音。次も同じ）で、β では同じく「ʐ」声母で、それぞれ写されている。西田氏はこの書き分けについて、

> この【α の諸例の―引用者】西番語形式が「ʃa, ʃu, ʃo」であつたとするよりも，当時の漢語には ʐa, ʐu（如声）, ʐuɔ 音節がなかつたから，西番語の「ʒa, ʒu, ʒo」を ʂa, ʂu, ʂuɔ で表記するほかはなかつたと考えた方が適切であろう．（西田（1970：54））

と説明し、西番語の zha、zhu、zho が漢字「厦」「熟」「朔」で表記された理由を説明しているが、zhi と zhe については西田氏は何も言っておらず、また西田氏の説明が必ずしも当てはまらない。本稿筆者はむしろ、西番語において、α では zh の前に子音がなく、β では zh の前に前置字 g- や b- がついていることが、音訳漢字の書き分けと関係があると見る。おそらく西番語の zh は、前置子音がなく単独で音節初頭子音を成す時にはやや無声化して発音され、前置子音がある時には完全な有声音で発音されたのではなかろうか。但し前者の場合も、音訳漢字のとる声調の振る舞いから見て、本来の無声音 sh との区別は明瞭であり、sh と zh の音韻的対立は維持されていたと考えられるから、西田氏の再構音に修正を迫るには及ばない。つまり、ここでの音訳漢字の書き分け α、β は、西番語における、音声レベルの微妙な差異を書き分けたものであると解釈するのである。

[26] 西田（1970）の原文では「一奪（828）」となっているけれども誤りなので訂正した。

z の用例では、西番語の音節が、前置字の有無にかかわらず、/s/ 声母の漢字で音訳されている。z の場合、漢語の側に、それに対応する声母が欠けている（zh の場合は、対応する日母系の声母（[ʒ] または [ʐ]）が存在するのとは異なって）ため、たとえ zh の場合について上に述べた音声レベルの有声・無声の差異が存在しても、音訳漢字においてそれを再現することは困難であると見られる。しかし、本稿筆者は、γ に分類された bzaŋ：卜蔵の対音に注目したい。ここでは、z に対して、例外的に、従母去声で /ts/ 声母の“蔵”が用いられている。西田氏は、この用例について、「有声破擦音 dz- を表示しようとしたものと考られる」（西田（1970：53））とだけ述べ、本論第三章に見える本項の再構成音の欄（西田（1970：84））にも「tʃhu bdzaŋpo」という形を記しているが、チベット文字 bz：西番語 /bdz/ の対応について、詳しい説明を行っていない。

本稿筆者は、この“蔵”は、完全な有声で、しかし摩擦音の [z] の音節初頭子音を意図したものと解釈する。他の言語の乙種本雑字において有声歯茎摩擦音 z を表記する場合に、/ts/ 声母の字が用いられる例が実際にあるからである。例えば：

『回回館雑字』

「地」zamīn、“則米尹”（46）　――「則」、精母

「日」rūz、“羅子”（99）　――「子」、精母

「臣」vazīr、“我即児”（139）　――「即」、精母

「千」hazār、“哈咱児”（663）　――「咱」、『翻訳老乞大・朴通事』左 ja'（一点）、右 ja（二点）[27]

『高昌館雑字』

「紫薇」altun qazuq、“俺呑 - 哈足”（42）　――「足」、精母

「梨」buzumla、“卜尊喇”（147）　――「尊」、精母

「眼」köz-i、“苦即”（356）　――「即」、精母

『高昌館雑字』のウイグル文字では、s と z は同形であり、上記のローマ字転写は Ligeti（1966）によっている。実際のところ、『高昌館雑字』の音訳漢字では、z に /s/ 声母字を用いた用例も多く、逆に s に /ts/ 声母字を用いた例（「嫂」yinggäsi“影克即”（260）など）もあるので、z が必ず /ts/ で表音されるとは言えないが、z に /ts/ 声母字を用いた例が存在するとは言える。例えば第一例の zuq：足を、「水」suv、“蘇”（46）や、「回回」musurman、“木速児蛮”（340）における su：速と比較すれば、/ts/ 声母字

[27]『翻訳老乞大』の用例の検索には遠藤（1990）を用いた。ローマ字転写も遠藤（1990）のものであるが、ただ声点の表示は遠藤（1990）の方式に拠らず、「一点」「二点」と記入した。ここで j はハングル字母の ji'euj ㅈである。

がウイグル語の [z] を意図していることが明らかになるであろう。また、丙種本の『畏兀児館訳語』の音訳漢字では、ウイグル語の /s/ と /z/ はより明瞭に区別され、前者は漢語音の /s/ で、後者は漢語音の /ts/ で、それぞれ表記されている（庄垣内（1984：66））。

有声摩擦音 z を音素として持たない言語において、外来音の z を破擦音の [dz]、[ts]、[tʃ] などで受け止めることは、日本語や朝鮮語など様々な言語に見られることである。日本語のローマ字やキリル文字表記のモンゴル語（ハルハ方言）において、z 相当の字母を破擦音 /dz/ の表記に当てている[28]ことも、方向性が逆（破擦音を摩擦音字母で表記する）ながら、参考になる。

以上のような理由から、本稿筆者は、西番館訳語の上記 γ「初卜蔵播」の“蔵”が、破擦音 [dz] ではなく摩擦音の [z] を意図しており、これが α におけると異なる表記をとったのは、z の強い有声性が、音写者によってたまたま書きとめられたためであると考える。実際には、『西番館雑字』において、このような「異例」の表記には他にも

bzung　　卜容　　執（591）

の例がある。音訳漢字“容”は、他では yung に対応する例がある（容-瓦、yung-ba、「姜黄」（522））。この字は喩（以）母字で、現代北京語では yóng と読まれることが期待されるが róng と読まれている。『西番館訳語』の音訳漢字の漢語で“容”がゼロ声母と /ɨ/ 声母のいずれに読まれていたかはわからない（『司馬温公等韻図経』では、容はゼロ声母を示している）が、/s/ 声母字でない漢字が用いられていることは確かであるから、これも、bzung の z の強い有声性の現れであると解釈できる。以上のような異例の表記から見て、西番語においては、zh ばかりでなく、z も、前置子音の前では完全な有声音で発音されていたと推測される。

現代チベット語諸方言のうち、カム方言やアムド方言においては、一般に、チベット文語の有声の閉鎖音・破擦音・摩擦音は、前置（上置）子音がない場合無声音化し、一方前置（上置）子音がある場合は有声性を維持する。金鵬（1983：121-124）では、チベット文語の［前置 / 上置子音］+［有声閉鎖音・破擦音・摩擦音］の音節初頭子音群について、中国に所在するチベット語諸方言からそれを持つ語例を豊富に挙げているが、カム方言とアムド方言において問題の子音が無声音化していないことが確かめられる。金鵬（1983：124）は“上述例词的浊声母都来自历史上的前置辅音（前置和上置字母）的浊声母。历史上不带前置辅音的浊声母，在现代口语里除个别地区外，都

[28] もっとも、少なくとも日本語のザ行子音は、本稿筆者の観察によれば、音声的環境により、純粋な摩擦音 [z] で発音されることもある。ザ行子音が破擦音で安定して出るのは、語頭と、撥音の直後である。

変成了清声母”と述べ、前置（上置）字母がない場合はこれらの方言でも子音の無声音化が起こることを指摘している。江荻（2002）も、アムド方言（北部方言）とカム方言（東部方言）において、問題の有声子音が、前置（上置）字母を持たない場合に無声音化し前置(上置)字母の後ろでは有声音を保つことを指摘している[29]。鈴木(2004)は、青海省共和県切吉郷の「チャプチャ・チェルジェ牧民方言」の記述において、有声摩擦音が語頭に単独では現れないと指摘した（鈴木（2004：151））上で、チベット文語で前置字を伴う摩擦音 z, zh(実際の音声でも前置子音要素が存在する）と前置字を伴わない z, zh の用例を挙げているが、前者は有声摩擦音、後者は無声摩擦音に記述されている。更科（2006)[30]では、アムド方言の牧地方言の話し手一名をインフォーマントにお願いして、『西番館雑字』の語項目に対する現代アムド方言の発音を記録しているが、やはり同様の結果を得た[31]。西田（1970）の本論第六章「チベット語諸方言と西番語 A」では諸研究や西田氏自身による湟中県アムド方言の記録を用いてチベット語の音韻比較を行っており、その記述の中からも、問題の有声子音に対して、非常に明瞭ではないものの、前置（上置）子音の有無を条件とした異なる反映が見て取られる。例えばアムド方言（西田（1970：222より抜粋））：

チベット文語	dom	rdo
湟中県	tom	γdo
意味	“bear”	“stone”

またカム方言（西田（1970：279より抜粋））：

チベット文語	za-ba	bzang-po
Derge	sawa	zompo
意味	“to eat”	“good”

いまわれわれが議論している『西番館訳語』の z, zh の様相は、現代アムド方言やカム方言が示すこうした段階につながっていく状態であると見られる。このことから考えて、来文のチベット文字表記漢語で、日母字に対して gzh- という綴りが見られるのは、zh の前に前置子音 g- を置くことによって、完全に有声の摩擦音をしめそうとする意図の現れであると考えることができる。但し摩擦音と言っても、現代北京語

[29] 江荻（2002）の202頁（表5.1c)、207頁（表5.4)、及び219-222頁の議論を参照。

[30] 筆者は更科（2006）を、その記述対象に非常に近い方言に対する極めて精緻な記述である鈴木（2004）がすでに発表されていたことを知らずに書くという失態を犯し、アムド方言音声の研究史を乱してしまった。この場を借りて、深く反省の意を表する。鈴木（2004）の観察が拙文と比べてはるかに精密かつ周到である点は言うまでもなく、結果として拙文は蛇足となったものの、鈴木（2004）に記述された方言がチェルジェの口語音であるのに対し拙文はチャプチャ鎮の街区に行われている文語の朗読発音である点など、記述対象に違いもあり、拙文に全く意味がないとまでは言えないと信じる。

[31] 但し口語音において、前置子音のない z, zh が有声で発音される例がそれぞれ一つずつ、計二つだけあった。

等から類推して、その口腔内阻碍の程度は摩擦音と呼ぶにふさわしいほど強くはなく、弱い摩擦噪音を伴う [ʒ] あるいは [ʐ] であっただろう。表2の「漢語音」の欄では、摩擦性の弱さをシンボライズする意図で、/ž/ ではなく /ř/ という音韻記号を選択した。gzh- の前置子音 g- は、「無声音グループ」において鼻音、接近音に前置され西番語のピッチを下降調にする前置子音とは全く性質の異なるものであるから、漢語の去声、陽平声いずれの字の表記にも用いられている。

2.2.3.2. r。チベット字母の r を以て表記された漢字は6個である。そのうちの5つ（擄聊廩領掠）は来母字であり、いずれも -i- もしくは -u- の介音を持つ来母字である点が特徴であるが、同じ条件においてもチベット字母の l で表記された字の方が多いので、これらは散発的な傍流であると見做すことができる。残る一字は日母止摂開口の“而”であり、re という音形は、この字がなお [əɹ̩] のような母音始まりの音節には変化していないことを示していて興味深い。日母止摂開口字の表記例にはもう一つ“邇”vu がある。v はチベット文字のゼロ声母であるから、母音始まり音節の段階を示しているが、母音が u である理由は不明である[32]。本資料の日母止摂開口字の発展は、声母として何らかの有阻碍子音を維持する段階と、『司馬温公等韻図経』以来現代北京語に至る北方官話がそうであるようにゼロ声母となっている段階とが、共存していることになる。

2.2.3.3. dr と shr。-r- はチベット語の下置字母の一つで、本来 -r- 的な介子音を表したと思われるが、現代のチベット語諸方言では、直前の基字と融合してそり舌子音を形成する場合が多い。『西番館訳語』の雑字において、基字 C_3と下置字 r の結合は、dr を除き、C_3に対して漢字一字を当て、r＋V（C_5）に対して漢字一字を当てる[33]。C_3=d である結合 dr は、dr＋V（C_5）に対して知荘章組の無声無気音字を当てる[34]。来文における漢語音表記においては、２．１に掲げたように、箚（知母二等入声）、知（知母三等平声）、之（章母三等止摂平声）、指（章母三等止摂上声）の声母が dr- で表記される。一方結合 shr は、チベット語の固有語には現れないもので、あるいは Laufer 氏が言うように、サンスクリット由来の ཤྲཱི śrī “glory, magnificence”（Das（1902/1997：1247））を意識した綴りであるかもしれない[35]が、師（生母三等止摂平声）、使（生母三等止摂上声）の表記に限って現れる。なお、“師：shri” は、雑字738「国師」、739「禅

[32] “邇”vu は東洋文庫本に見える対音であり、本稿では西田（1970：139）の転写によっている。西田（1970：140）は「邇 ḫu は漢語の音写」と記している。
[33] 西田（1970：59）。
[34] 西田（1970：61）。
[35] Laufer（1916：524）は、本資料にも現れている「国師」という語のチベット文字綴り字を議論し、次のように述べている："The writing šrī seems to have been prompted by adaptation to Sanskrit çrī."

師」にも表れる対音である。

漢語の知荘章組の音節は、表2にも梗概を示しておいたように、チベット字母のシュー音破擦・摩擦音系列 j, c, ch, sh によって表記されるのが一般的である。チベット字母は漢語同様歯擦音が豊富で、シュー音系 c, ch, j sh, zh の他にスー音系の ts, tsh, dz, s, z があって、スー音系は精組の漢字音の表記に当てられていて例外は一つもない。-r- を介した表記は、散発的ではあるが、漢語音のそり舌性を表そうとしたとしか解釈できないもので、この時代の漢語のそり舌音の発生を積極的に証するものであろう。

2.2.3.4. ng。例は“安”ngan の一字だけである。“安”は影母字であり、一方チベット文字の ng に音声的に相当する疑母字は、本資料ではみなゼロ声母化している（但し、次項2.2.3.5参照）。乙種本『華夷訳語』の中で、軟口蓋鼻音 [ŋ] を音節初頭子音として持つ言語を表記対象としたものに『百夷館訳語』『八百館訳語』『緬甸館訳語』『暹羅館訳語』があり、暹羅館を除き、漢語音を民族文字で表記した部分がその『来文』中に存在している。それらの漢語音表記中の軟口蓋鼻音声母の用例を全て挙げると、次の通りである。

『百夷館訳語』[36]

安	影母	ngan
恩	影母	ngön

『八百館訳語』[37]

我	疑母	ngå
恩	影母	hngään

『緬甸館訳語』[38]

我	疑母	ngå
鞍	影母	ngaṁ
安	影母	ngan
恩	影母	ngon

[36] 更科（2022a）参照。

[37] 更科（2022b）参照。

[38] 緬甸館来文のビルマ文字表記漢語音の分析については西田（1972）に詳しい。なお西田（1972：199）では、これらの表記に現れる ng- について、「これは対象となった漢語が，当時なお ŋ- を保存していたためとは考えられず，おそらく雑字でなされた緬甸語の漢字表記から類推して，たとえば，雑字で緬甸語 ŋaa を我で, ŋan を安で表記するなどから類推して, とられた転写法である可能性がつよい」と述べている。按ずるに、その可能性は確かにあって、たとえば「位」を ngwe と表記した例などはそうであるかも知れない。しかし、近代北方漢語において疑母の [ŋ] 音が消失したのちも、北京以外の方言では、声母としての [ŋ] が必ずしも全くなくなったわけではなく、かえって影母字などの一部が [ŋ] 声母を帯びることは広く見られるから、ここに取り上げた [ŋ] 表記も、全く現実的根拠のないものであるとは言えない。

位　　喻(云)母　ngwe

このように、疑母字で ng- 表記となっているものは“我”のみであり、他は影母開口字の“安恩”などである。但し、声母に ng- 表記が現れる字が『訳語』間で必ずしも一致するわけではなく、例えば『百夷館』と『緬甸館』で ng- を帯びる「安」は、『八百館』では 'aan と表音されるし、また『八百館』と『緬甸館』で ng- を帯びる「我」は、『百夷館』では 'â と表音される。

2.2.3.5. ñ と ny。ñ は「寧」に現れる。韻母の -ing の前舌高母音の影響で、散発的に ñ が選択されたものと見られる。寧は ning とも綴られているが、ning の例は東洋文庫本に現れるものである。本稿では、東洋文庫本の来文は西田（1970）の転写によっており、原文を確認するに至っていない。

ny は「仰」に現れる。基字 n に下置字 y が続く綴りは通常のチベット語には存在しないものであり、漢語音のために特別になされた表記であるという印象を強く与える。仰は疑母字である。疑母字は、すでに述べた通り、本資料でも通常ゼロ声母で現れるが、この字だけは例外的に鼻音の要素を保存している。現代北京語「牛」niú の類の、疑母の残存であろうか。

2.2.3.6. phy。phyi の綴りで、「悉膝」に現れる。雑字において、チベット文字の連続 phy は、「斜細削信泄素」など心邪母（素を除き、細音）字で音訳されており、西田（1970：59）はこの連続に「sj」という再構音を与えている。よって、phy によって表される漢語音もまた /s/（i の前）の表記を意図していると見てよい。

2.2.3.6. hw。基字 h に下置字 w が続く結合。漢語の /f/ 声母に対応する場合と、/x/ 声母合口に対応する場合とがある。チベット語には /f/ という子音がないため、漢語音の /f/ の表記のために、hw という結合が用意されたのである。

２．３．介音の対応について

チベット文字には、基字と母音の間に位置する下置字 w, y, r, l がある。このうち l は、来文の漢語音表記では「gling 凌」の一例が見えるだけであり、かつ事実上 l が基字の位置を占めている（実際のところ、チベット語の下置字母 -l- は、ほとんどの場合自分自身が基字であるかのようにふるまい、本来の基字を脱落させ単に声調に痕跡的影響を残るようにさせるか、もしくは前置子音の地位に追いやってしまっている）ため、漢語音の介音表記の議論にはほとんど関わらない。-r- については2.2.3.3において既に述べた。ここでは、-w- と -y- の対音状況について述べる。

２．３．１．-w-

-w- はチベット文字の四つの下置字母の中でも活性度が最も低く、チベット語の単語では母音 a の前にしか現れない[39]。かつ、現代方言の多くでは全く発音されない[40]。しかし『西番館訳語』雑字328に、音節 zhwa（「帽」）に対して音訳漢字“刷”（生母二等錯韻合口）を当てた例があることから、西田氏は、西番語に介子音 -w- を認めている（西田（1970：62））。いずれにせよ、チベット語固有語において -w- はあまり活躍しないにもかかわらず、来文の漢字音表記では頻繁に用いられており、特記すべきことには、a 以外の母音とも共起する。今、漢語音の /f/ を表記するための hw の例以外の用例を全て挙げれば次の通りである。

1）a と共起

gwa 寡、hwa 化、gwang 光広、jwavu 准【韻！】

2）o と共起

zwon 宣、cwon 篆、jwon 専、chwon 川、hwon 患、hwovu 懐【韻！】

これらは、漢語の合口介音（合口呼あるいは撮口呼）を表記するために特に工夫された方式であると考えられる。

２．３．２．-y-

下置字母としての -y- は、チベット語固有の単語にも盛んに用いられる。2.2.3.6で取り上げた結合 phy- を除き、来文の漢字音表記に用いられたものは次の通りである。

by-：byavu 表

dmy-：dmyavu 妙

ny-：nyang 仰

tshy-：tshyon 全

zy-：zyang 祥

ry-：ryavu 聊

ky-：kyavi 戒、kyavu 教

gy-：gya 嘉、gyu 倶拒、gyavi 階皆、gyivu 久、gyen 堅、gying 警

khy-：khye 缺闕、khyo 恪、khyu 瞿、khyan 愆、khyen 虔

hy-：hya 夏、hyavu 暁、hyen 献県、hyang 項、hying 幸

以上のうち、ny-、tshy-、zy-、ry- は、チベット語には本来存在しない結合であってたいへん特殊である。漢語の /iau/、/iang/ の両韻母の表記に現れたものが多いが、

---

[39] Benedict（1972：49）。

[40] 江荻（2002：234）。

tshyon「全」は例外であり、zwon「宣」と共に、三四等合口の介音を不完全に表記したものと見られる。これらも、漢語の韻母を表記するために特に工夫された方式であると考えられる。

結合 by- は、西番語では特殊な音韻変化を起こしており、『雑字』の音訳漢字では /s/ 声母の細音に対応する。西田（1970：59）の西番語再構音は zj である。但し、前に s-、v- などの前置子音がある場合は、/p/ 声母細音に対応する（西田（1970：59）の西番語再構音は bj）。

bya 斜	「鶏」（454）	…斜、邪母三等麻韻
byi-ru 席-盧	「珊瑚」（485）	…席、邪母三等昔韻
byon 旋	「請」（568）	…旋、邪母三等仙韻
snam-sbyar 思難-思別児	「袈裟」（333）	…別、幇 / 並母三等薛韻
vbyor-pa 恩別児-罷	「豊足」（619）	…別、同上

来文の漢字音表記において byavu を「表」の表音に当てるのは、西番語側での by の音韻変化とは無関係で、漢字音のための特別な表記法が採用されたことになる。

-y- は、細音の牙喉音声母字の表記にはとりわけ多く用いられ、共起する母音も豊富である。中でも注意を引くのは、前舌母音 i, e と共に用いられた例である。来文の漢字音表記では、通例、前舌母音の前では、細音字であっても -y- を必要としない。pen 忭、tshen 千僉、zi 西、ming 明などがその例である。牙喉音声母字の表記でも、ge 結、gi 及吉、khin 欽など、前舌母音の前で -y- を用いていない例は存在する。それにもかかわらず、少なからぬ牙喉音細音字において、前舌母音の前にわざわざ -y- が用いられているのはなぜであろうか。あるいは、当時の漢語の牙喉音細音字が、すでに口蓋化し始めたことを表しているのかもしれない。但し、『来文』において漢語の牙喉音声母をチベット字母の ts-, tsh-, dz-, s-, z- や c-, ch-, dz-, sh- zh- で表記した例は一例もなく、また『雑字』においては、西番語の ky-, khy-, gy- には例外なしに牙音字が当てられ、歯頭音の音訳漢字は全く用いられていない。従って、本資料の漢語では、所謂尖音と団音の合流は全く起こっていないと言うべきであり、ただ団音たる牙喉音細音に対して、音声レベルで [c, ch, ç] のような変種が想定されるに過ぎない[41]。

[41] 一方、太田（1980）は、西番館訳語の丙種本に、チベット語の ky-, khy-, gy- に対して牙音のほか歯頭音や正歯音の音訳漢字が用いられた例が複数あることなどから、音訳漢字の漢語が尖団の区別を失っていたと結論している（太田（1980：145））。太田氏の結論が正しければ、西番館訳語の乙種本と丙種本とで、表記対象の西番語のみならず、漢語側の音韻体系も異なっていることになる。他の語種のものも含め、丙種本の音訳漢字を精査してみなければならない。

２．４．韻母の対応について

２．４．１．主母音

チベット文字の母音は a, i, u, e, o の五つである。以下、それぞれの母音で表記される漢字音について、小節を分かって検討する。各小節の冒頭に、その母音を持った韻母形式の例字を任意に一つずつ掲げる。

2.4.1.1. a。sha 沙、gwa 寡、gya 嘉、thav 塌、gavi 該、gyavi 階、tavu 道、kyavu 教、bam 頒、gzhan 然、khyan 愆、hwan 藩、chang 長、hyang 項、gwang 光、dad 徳などの表記に用いられる。

韻母表記 a, ya, wa は仮摂二等字、及び咸摂の入声字（非―乏韻；箝―洽韻）に用いられる。「塌」（咸摂一等入声盍韻）に見える韻母表記 av も、a と等価であると考えられる。

韻母表記 avi は蟹摂一二等字に用いられる。但し牙音二等は韻母表記 yavi を取る。入声字として、「冊」chavi（初母梗摂二等開口麦韻）の用例がある。

韻母表記 avu は効摂の諸字に用いられる。牙音の二等と唇・半舌・喉の三四等には韻母表記 yavu が見られる。懽 havu（暁母山摂合口一等桓韻）と准 jwavu（章母臻摂三等合口準韻）は異常対音である。

山摂、咸摂の舒声字は、韻母表記 -an/am、-en、-on を取る。an/am は一二等開口字で、一等唇音の「半」、二等正歯音の「攙」を含む。また、「愆沿延」の三字は三等韻である（沿は合口）。en, on については、2.4.1.4, 2.4.1.5をそれぞれ参照。

韻母表記 ang, yang, wang は江宕摂の舒声字に用いられる。

dad で表記される「徳」は一等徳韻開口の入声字である。雑字の西番語に、-ad, -as で閉じる音節があり、多くは仮摂二等、山咸摂一二等など、/a/ 韻母字で表記されている（例えば、bad 抜「霜」(8)、bcas 卜乍思「全」(625) など。後者は“乍”が ca に、“思”が -s に、それぞれ対応する）が、次のように、蟹摂一二等や、曽摂一等入声、梗摂二等入声の漢字で表記された例が少数ある。

pad-ma 百-麻	「蓮花」(419)	…百、梗摂二等入声（陌韻）
tha-dad 塔-得	「各」(635)	…得、曽摂一等入声（徳韻）
gnas-brtan 内思-本児旦	「羅漢」(379)	…内、蟹摂一等合口去声（隊韻）
las-ka 勒思-葛	「職事」(575)	…勒、曽摂一等入声（徳韻）
rim pa rim pas 林罷林拝思	「累」（ベルリン本続編56b）	…拝、蟹摂二等去声（怪韻）

西田（1970：65）は、この種の -ad, -as に対応する西番語の音形式として ε、εs を設定している。漢語音韻史の立場から見た場合、「内」「拝」には韻尾 -i があり、入声の「百」「得」「勒」も『蒙古字韻』など元代の資料や北京口語音では -i を持って

いるから、西番語の音形式として ai や εi のような二重母音を想定することもできる。来文の漢語音表記にも、すでに述べたように、「冊」を chavi と表記した例が見えるので、『雑字』に見える「百」「得」「勒」にも二重母音を想定する余地がないではない。一方、もし「徳」が二重母音を持っているとすれば、来文では davi のように表記されたはずであるから、これを dad と表記したのは、やはり西田氏の再構音のように、単母音の [ε] を意図した結果であるとここでは見ておきたい。-d を入声の閉鎖音韻尾の残存とは見做さないことは、乙種本が反映している明代漢語の様相全体から見て当然である。

2.4.1.2. i。li 利、tivi 体、jivu 州、gin 金、cing 正などの表記に用いられている。

韻母表記 i は『中原音韻』の支思韻・斉微韻に所属するもののうち開口字にほぼ相当する。唇音の被備（以上 pi）、匹（以上 phi）を含む。所謂舌尖母音に対して特別な表記法をとった形跡はないが、一部では声母によって区別がなされている。例えば

phyi 悉膝：si 絲思四司四

において、phyi は [sji] ないし [ɕi] のような音声を意図したもので、一方 si は [sɿ] を表記したと解すべきであろう。但し他の声母においては、tsi で茲資（精母止摂開口）を表記し tshi で慈（従母止摂開口）を表記しているのに、dzi は齎（精母蟹摂開口）を表記しているといった例もあり、結局のところ舌尖母音と舌面母音は表記上区別がない。もちろん実際の漢語には舌尖母音が存在し、舌面母音とは区別されていたに違いない。但し、例えば dri と表記される「知之」の韻母が [ʅ]、[i] のいずれであったのかといったことは結論が出せない。

韻母表記 ivi は「指体」の二字に見られるが、散発的な表記であり、i と等価であると見られる。

韻母表記 ivu は「久州陪調由修寿」に見られる。うち陪 mivu は声母、韻母とも異常対音で解しにくい。他は、調 tivu が効摂なのを除き流摂三等字である。

韻母表記 in は臻深摂三等字を主とするが、秉 bin と領 rin は梗摂三等であって例外となる。

韻母表記 ing は曽摂三等及び梗摂三四等（幸 hying は二等）を主とするが、陳 ching と信 sing は臻摂三等であって例外となる。また曽 tshing は曽摂の一等字である。

舌歯音三等字（日母含む）はみな、i 母音を帯びている。韻母表記 ivu, in, ing にその例が見られる。

知母：cin 鎮

澄母：ching 陳懲

章母：jivu 州；cing 症正政

書母：shing 勝

禅母：zhivu 寿；shin 甚；shing 盛；ching 成誠

船母：ching 乗

日母：gzhin 仁任

2.4.1.3. u。pu 布、dbui 衛、dzun 尊、gung 公などの表記に用いられている。

韻母表記 u は、遇摂の一等模韻（平声を挙げて上去声をかねる）、同三等魚、虞韻（同左）の他、入声字の「六逐睦」（通摂：屋韻三等）、「朮」（臻摂：術韻三等）を表記した例がある。遇摂三等の「魚於」は yu、「俱拒」は gyu、「瞿」は khyu とそれぞれ表記される。遇摂一等と同じ母音で表記されるのは、表記対象の漢語において [y] 母音がまだ産生していなかったからではなく、西番語に [y] という母音がなく、近似値的に yu を以て表記した結果であると解釈する。

韻母表記 uvi は、止摂と蟹摂（三四等）のいずれも合口字の表記に用いられる。その中には「非」（微韻三等合口）hwuvi が含まれる。他に、入声字「国」（徳韻一等合口）を guvi と記している。この字音は、『蒙古字韻』四支 "kuj" 音節の入声の位置[42]、また『中原音韻』斉微韻の「入声作上声」の位置に「国」の字が見えるのと同じ段階を示し、明代官話音としては古めかしい。実際のところ、来文において、「国」guvi は「護国寺」「番国」「鎮国」などの語句に現れた例もあるが、大部分は「国師」guvi shri（または「大国師」tavi gui shri）の音訳として出現し、すでに（2.2.3.3にて）述べたように、『雑字』にも登録されている。国師とは“帝王封賜僧人的尊号”（『漢語大詞典』）であり、チベット語の語彙としても gu shrī の形で借入されている。“元明以来対藏族高僧所加封号”（張怡蓀（1993：356））、“state preceptor, royal teacher; a title conferred on the Buddhist clergy”（Laufer（1916：524））。チベット世界で中華世界と交渉する立場の者には古くから知られた称号であっただろうから、チベット語の使用空間では、やや古い発音が広く流通していたことは考えられる。それが記録された可能性がある。

韻母表記 un は臻摂一等･三等合口字を主とする。その中には bun「本」が含まれる。他に、通摂一等の「宗同潼」及び同摂三等の「種捧」の表記例があり、-ng が -n と混同されている。

韻母表記 ung は通摂一三等合口字を主とする。一等字と三等字の間に、下置字や母音の表記上の書き分けは見られない。hung 弘は曽摂一等合口、yung 永は梗摂三等合口である。yung「允」は臻摂三等合口で、-n が -ng と混同されている。

2.4.1.4. e。ge 結、khye 缺、then 天、gyen 堅、yevu 優などの表記に用いられている。

韻母表記 e は、山摂入声四等開口の ge 結、及び仮摂三等開口の je 者、she 舎、tshe

[42]『蒙古字韻』の検索は沈鐘偉（2015）を参照し、ローマ字転写も同書に従う。

且に用いられる。特殊な例として、re と表記された而（日母、止摂三等開口）がある（2.2.3.2参照）。

韻母表記 ye は、山摂入声三四等合口の khye 缺闕に用いられている。khye という綴りは、同じく山摂入声四等で開口の ge 結と比べて、-y- が増えた格好になっているが、この -y- が合口要素を表したと考えることはできず、-y- は何かほかの要因（例えば、2.3.2で言及した声母の口蓋化など）によって附せられたものと解するほかない。従って、ye は、韻母部分の表音意図としては、e と同じである。

韻母表記 en, yen は、山摂（非入声）三四等開口及び咸摂（非入声）三等開口の字を表記する。うちチベット字母の舌面音系列の字母で表記される chen 闡（昌母）、chen 禪（禪母）、shen 善（禪母）、zhen 陜（書母）はいずれも章組（照三）であり、一方 chan と表記される攙は初母（莊組、即ち照二）である。母音の違いは三等と二等の違いと対応しているように見えるが、一方で同じく三等系の“然”（日母）は gzhan と表記され、a が現れている（2.4.1.1参照）。韻母表記 yen を持つのは全て牙喉音で、gyen 堅、hyen 献、hyen 県（四等合口）、khyen 虔の四字である。2.3.2にも述べたように、pen 忭など -y- のない表記との間に韻母上の差異を見出すことができないので、韻母表記 yen と en は、事実上同じ韻母を表記したものであると解釈される。一方同じ音韻地位にある韻母を -yan と表記した khyan 愆の例があり、基字 y と韻母表記 an を組み合わせた yan という音節表記が「沿延」に見える。以上三字はいずれも二等字ではなく三等字であり（「沿」は合口）、韻母表記 en, yen との間の書き分け条件を発見することができない。

韻母表記 evu は yevu 優（影母、流摂三等）の一例のみ。通常流摂三等字は -ivu で表記される（2.4.1.2参照）ので、yevu は散発的表記のようである。書き分けの条件を発見できない。

2.4.1.5.o。ho 合、khyo 恪、yovu 揺、gon 官、chwon 川、tshyon 全、tong 東などの表記に用いられている。

韻母表記 o は、ho 貨合河何呵、zho 所に用いられている。ho と表記された字のうち、合は咸摂入声一等開口、残りは果摂一等字であり、果摂一等字のうち貨は合口、他は開口である。果摂一等の開口と合口の区別はない。「所」は生母遇摂三等で、母音 o を取るのは中古音の観点からは不規則であるが、現代北京語でも suǒ と読まれている。『四声通解』第五模姥暮・審母上声「所」（šu）の上に、「今俗音 so」とある。『司馬温公等韻図経』においても、「所」は果摂第十三合口篇の審母上声の位置にあり、陸志韋（1947）による音価は ʂuo である。按ずるに来文の zho 表記もこの系統で、z ではなく zh が用いられているので、声母は ʂ ないし ʃ でなければならない。

韻母表記 yo は、khyo 恪と yo 躍に用いられている。「恪」は渓母宕摂一等開口鐸韻字で、なぜ -y- を含んだ khyo に表記されているのかわからない。「躍」は宕摂三等開口薬韻字である。なお、yo に準ずる特殊な韻母表記に yog があり、「躍」と同じく宕摂三等開口薬韻字である ryog 掠に用いられている。雑字において、西番語の -yog に「約」などの薬韻字をしばしば用いている（例：g-yog-po 約 - 播「奴婢」（152））ことが、ryog という表音の背景にあるのではないか。

韻母表記 ovu は、yovu 揺の他、異常対音の hwovu 懐に現れる。懐は蟹摂二等合口皆韻であり、-ovu 表記は不可解である。揺は効摂三等字で、yavu が期待されるが母音が o になっている。韻尾が弱化した [iɔu] のような音声を描写したものかもしれないが、散発的な表記であると見ておく。

韻母表記 on は山摂一二等合口の gon 官関、kon 灌に現れる。二等の“関”がこの韻母表記を取っているので、『中原音韻』の桓歓と寒山の別に相当する一等と二等の区別はない。

韻母表記 won は山摂合口字の cwon 篆、chwon 川、zwon 宣、jwon 専、hwon 患に見られる。「患」は二等で他は三等である。同じ山摂二等合口の「関」が gon で表記され「患」が hwon で表記されており、-w- の有無がいかなる条件に依るのか明らかにできない。2.3.1に述べたように、下置字母 -w- はチベット文字ではふつう o と共起しないので、-w- が加えられているのは、外来音としての w 介音を特に示す意図があったものと見られる。

韻母表記 yon も won と同様山摂三等合口字の表記に用いられる。tshyon 全（従母）を除き、ゼロ声母系の g-yon 院、yon 員原元に用いられる。現代チベット語（ラサ方言）でも、例えば「委员」wěiyuán という漢語を借用して u yon としている[43]。

韻母表記 ong は、通摂一三等の cong 鐘、mong 蒙、tong 東、臻摂合口一等の tshong 及び山摂合口二等の gong 関に現れる。通摂一三等字は韻母表記 ung によっても表記され、ung で表記される方が多い。ung と ong の書き分け条件は発見できない。「存」と「関」は -n と -ng の混同を示す例で、うち「関」は唯一外転系での混同例である。gong：関は東洋文庫本来文の「関支」という語句に一度現れる（西田（1970：131））が、本稿筆者は原文のチベット文を確認するに至っていない。この箇所以外の「関」は、ベルリン本と四庫存目書本含め、全て gon に作っている。

---

[43] 張怡蓀主編『漢蔵大辞典』3139頁。岩佐（1983：112）にも、漢語からラサ方言に入った借用語の例としてこの語が紹介されている。

２．４．２．韻尾

チベット文字では、音節末子音を表記する要素として「後置字」及び「再後置字」がある。このうち再後置字は来文の漢語音表記と関係しないので説明を省く。後置字には -g, -ng, -d, -n, -b, -m, -v, -r, -l, -s があり、来文の漢語音表記にはそのうちの -g, -ng, -d, -n, -m, -v が使われている。後置字のほかに、音節副音を構成する綴り -vi, -vu があり、来文の漢語表記にも使われている。

2.4.2.1. -v。thav 塌に見える。来文の漢字音表記には他に用例がなく、非常に散発的な使用であるにとどまると言える。その機能はよくわからない。

2.4.2.2. -vi と -vu。それぞれ、漢語の -i と -u を表記している。韻母表記には avi, yavi, (ivi), uvi; avu, yavu, ivu, (evu, ovu) である。特筆すべき表記に、chavi 冊（2.4.1.1）と kuvi 国（2.4.1.3）の二つの入声字がある。

2.4.2.3. -g と -d。ryog 掠（2.4.1.5）と dad 徳（2.4.1.1）の二つの入声字に見える。それぞれの小節に述べたように、-g も -d も、漢語の入声韻尾を写したものではなく、雑字における漢蔵対音を参考にしたものであろう。来文において、漢語の入声字はほぼ全て開音節の綴り字で表記されており、明代という時代からも十分に予期される通り、入声韻尾がすでに脱落した状態を反映する。同じ特徴は、『西番館雑字』の音訳漢字や、他の全ての華夷訳語の音訳漢字並びに民族文字による漢語音表記とも、基本的に共有されている。

2.4.2.4. -m, -n, -ng。-m を帯びる韻母表記は am のみで、用例も僅少である：

bam 頒、gam 敢感、ham 罕、lam 襴

この五字のうち、中古の -m 韻尾字は敢感の二字だけである。来文が表記している漢語では、-m と -n はすでに合流し -n となっていることがわかる。管見の限りにおいて、乙種本・丙種本の『華夷訳語』は基本的に、-m が -n にすでに合流した状況を示している。

-n と -ng の区別は比較的よく表記し分けられているが、すでに見た通り、混同の状況が少数見られる。-n と -ng の混合は外転系よりも内転系に多く見られるが、同じことは『百夷館来文』や『八百館来文』の漢語音表記にも言える。この混同は民族文字の単なる誤記ではなく、内転系で -n と -ng の区別のない方言音が若干混入したものであろう。しかし、内転系韻母においても、-n と -ng の区別は保たれるのが、これらの漢語音表記の本流であり、同じことは諸『訳語』の雑字部分の音訳漢字についてもあてはまる。

３．おわりに

『西番館訳語』の来文は、乙種本『華夷訳語』の他の言語版の多くがそうであるように、漢文面が先にあって、チベット語文面は、漢文面を、ある時はフレーズ単位に、ある時はまったく逐字的に、直訳して作成された。『西番館来文』には、知られる限りにおいて、『緬甸館来文』のような、漢文面全てをすっかり音写して作成されたものは存在せず、また『百夷館来文』や『八百館来文』のような、意訳テキストと音訳テキストとが交錯する体裁も存在していないが、『高昌館来文』と同じように、意訳に交じって一部の語句が音訳されたものが大量に存在している。これらのチベット文字表記漢語音を抜き出して検討してみると、周到な準備のもとになされ、一定の組織を備えた表音法であることが明らかになる。例えば字母 n や r の下に -y- が置かれたり、-w- が a 母音以外とも共起するなど、チベット語を表記する時には用いられない組み合わせが、意識的に用いられている。このようなチベット文字による漢語音表記が、明代においてどれほど一般的であったのか、四夷館の外でも確立していた表音方式であったのか、本稿筆者は寡聞にして知らないが、とりあえずの報告として、分析結果を公表した次第である。

参考文献

岩佐　昌暲（1983）『中国の少数民族と言語』、中国語研究学習双書5、光生館。

遠藤　光暁（1984）《〈翻译老乞大•朴通事〉里的汉语声调》,《语言学论丛》第十三辑, 162-182页。

遠藤　光暁（1990）『《翻訳老乞大・朴通事》漢字注音索引』、好文出版。

太田　斎（1980）「尖団小論」、『人文学報（東京都立大学）』第140号、139-154頁。

更科　慎一（2006）「現代アムドチベット語による『（乙種本）西番館雑字』の朗読に対する音声的分析」、『山口大学文学会志』第56号、71-100頁。

更科　慎一（2021）「ウイグル語学習書としての『高昌館来文』の性質について」、『異文化研究』（山口大学人文学部）第15号、66-81頁。

更科　慎一（2022a）「『百夷館訳語』来文に見られる明代漢語の表音システムについて」、森野正弘・富平美波編集責任『東アジア文化の歴史と現在』（山口大学大学院東アジア研究科・東アジア研究叢書６）、白帝社、122-155頁。

更科　慎一（2022b）「『八百館来文』に見られる八百文字表記漢語について」、『山口大学文学会志』第72号、75-112頁。

鈴木　博之（2004）「アムドチベット語チャプチャ･チェルジェ方言の音声分析」、『京都大学言語学研究』23、145-165頁。

庄垣内　正弘（1984）「『畏兀児館訳語』の研究－明代ウイグル口語の再構－」。内陸アジア語の研究Ⅰ（外国学研究（神戸市外国語大学）16）、51-172頁。

西田　龍雄（1970）『西番館譯語の研究』、松香堂。

西田　龍雄（1972）『緬甸館譯語の研究』、松香堂。

本田　實信（1963）「『回回館訳語』に就いて」。北大文学部紀要11、224-150頁。

山口　瑞鳳（1998）『チベット語文語文法』、春秋社。

江　荻（2002）《藏语语音史研究》，民族出版社。

金　鵬（1983）《藏语简志》，民族出版社。

陸　志韋（1947/1988）《记徐孝〈重订司马温公等韵图经〉》。もと燕京学報32、今《陆志韦近代汉语音韵论集》，商务印书馆1988年，54-84頁所収による。

沈　鐘偉（2015）《蒙古字韵集校》，商务印书馆。

張　怡蓀（1993）《藏汉大辞典》，民族出版社。

Benedict, Paul K., 1972, *Sino-Tibetan: A Conspectus*. Cambridge University Press.

Das, Sarat Chandra（1902/1997）, *A Tibetan-English Dictionary with Sanskrit Synonyms*, Asian Educational Services.

Kiyose, Gisaburo N., 1977, *A Study of Jurchen language and script*. Hōritsubunka-sha.

Laufer, Berthold（1916）, Loan-words in Tibetan. *T'oung Pao*, Volume 17, pp.403-552.

Ligeti, Louis, 1966, Un vocabulaire sino-ouigour des Ming, le Kao-tch'ang-kouan yi-chou du Bureau des Traducteurs. *Acta Orientalia Hungaricae*, Vol.19, pp.117-199; 257-316.

【本研究は JSPS 科研費 JP20K00545の助成を受けたものです。】